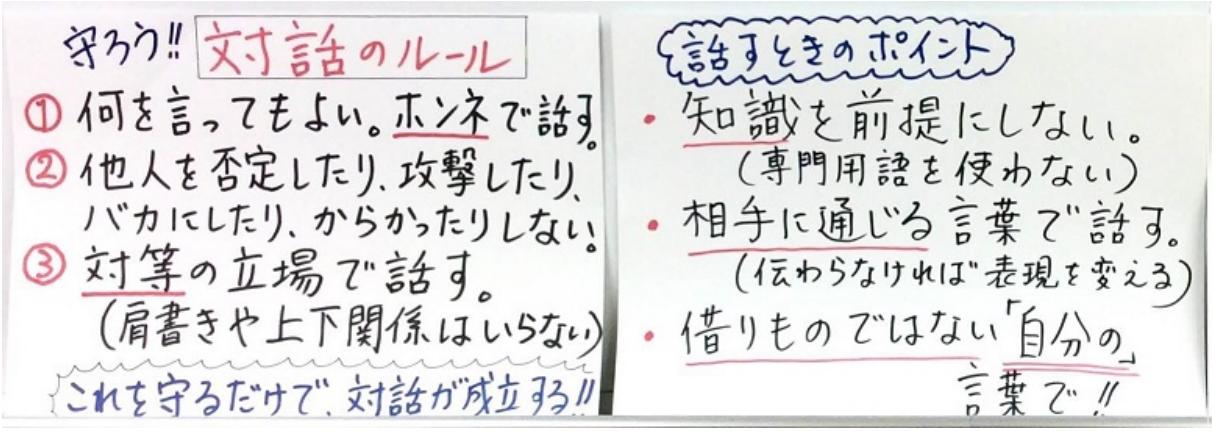
「哲学カフェ」実施報告

テーマ：ルールをめぐる、あれこれ
開催日：2020 年 1 月 22 日（水）

帝京大学宇都宮キャンパスで実施している「哲学カフェ」も、通算 16 回目を迎えました。
2020 年最初の哲学カフェは、性別も年齢も立場もさまざまなバラエティに富んだ総勢 12 人が参加しました。本学からは、ファシリテーターを務める総合基礎科目講師 江口建に加えて、機械・精密システム工学科教授 森一俊、総合基礎科目准教授 滝澤武、バイオサイエンス学科准教授 平澤孝枝、そして本学の学生も参加しました。
哲学対話のルールや心得を確認し、対話がスタートしました。



■「4 時禁ルール」！？

今回は「ルール」をテーマに対話を行いました。先日ニュースで話題になった岐阜の小中学校の、授業が午前中で終わった日でも午後 4 時まで外出禁止という「4 時禁ルール」。どうしてこんなルールがあるのでしょうか。このルールは本当に必要でしょうか。そもそもルールは誰のためにあるのでしょうか。
このような話題提起が参加者の一人からされました。学校は生徒の身だしなみについて事細かに指定してきます。髪の色・長さ、髪ゴムを留める位置、靴下の色など、子どもからすれば「どうして？」と疑問に思うことばかりです。別の参加者が「不登校の中学生の息子が、やはり同じように学校の『しきたり』に理不尽なものを感じている。今の日本の学校には戦中の軍隊教育の名残を感じる。令和になっても戦後の昭和の教育を引きずっているように思える」と述べました。
体育の授業での「整列！前ならえ！休め！回れ右！」などは軍隊教育の典型例ですが、このような風習は教師の普段の振る舞いにも表れます。例えば、上記の場合は学校で先生に話をする前に怒鳴られるそうです。軍隊であれば上官の命令は絶対なので逆らうことは許されません。部下が失敗をしたり口答えをしたりすれば無条件に怒鳴られます。
しかし、どうして学校でいきなり怒鳴られなければならないのでしょうか。学校は軍人を育てる場所ではなく、教育する場所のはずです。

ここで江口講師が問いかけました。少し前には存在して、今は存在しないルールにはどんなものがあるでしょうか。
参加者から学校給食のエピソードが出ました。自分が生徒のとき給食が美味しくなかった。すると、「給食は残さず食べる」という理由不明のルールのために、大抵は居残りをして無理やり食べていたそうです。
ところが最近では、給食を無理やり食べさせると「虐待」や「体罰」に相当する場合があります。また、体質やアレルギーなどについての理解も深まっており、完食を強要するケースは少なくなっています。ほかにも、昔は公然と敷かれていたが今では撤廃されつつあるルールがたくさんありそうです。それに応じて子どもも、「どうせ怒られないから」と自由に振る舞う様子が観察されます。学校のルールの変化には、社会の意識、教師の意識、親の意識、子どもの意識の変化が入り乱れて反映されているようです。

■「変わるもの」と「変わらないもの」

他方で昔から変わっていないルールもあります。大部分の校則がそれです。靴下の色、登校靴、カバン、髪型、スカートの長さなどはなぜかずっと変わりません。ということは、世の中には、**時代とともに「変わる」ルール**と、**時代が変わっても「変わらない」ルール**の 2 種類がある、ということでしょうか。
変わるものと変わらないもの、その違いを生み出しているのは何でしょうか。いまだに変わらないものは今後変わるべきなのか、それともこのまま変わらなくてよいのか。あるいは、今では変わってしまったけれど本当は変わるべきではなかった（変わらないほうがよかった）ルールもあるのでしょうか。
少なくとも校則の大部分は変わらないままです。
ある参加者が「国際化やグローバル化の波に乗って大人の世界では多様性と言う一方で、子どもに対しては、結局は多様性を認めないことが日本社会であるように思う」と言いました。
ここで、別の参加者が「少人数のときにはルールがあってもなくてもあまり変わらない気がする」

と発言しました。つまり、構成員が少ないコミュニティでは、イレギュラーな出来事や逸脱行為が起こったときでも十分に個別に対応できます。しかし、大人数になると個別に対応していたのでは埒が明きません。だから一括でルールを決めて、そこからはみ出した者は一律に「良くない」とするのが合理的なのだろう、という考えです。
しかし、まさにこの対応に私たちはしばしば理不尽さや違和感を覚えます。ある参加者が口にしました。**「禁止する理由が、そこに存在していない」**校則を本当に守りたいと思わないのは、そこに「禁止する理由」が存在していないからではないか。少なくとも、「守ろう」と思わせてくれるだけの十分な理由を生徒たちが感じられないからではないか、という意見です。ルールを守らない子どもは、しばしば反発していると大人から勘違いされますが、決して反抗しているわけではなく、守りたいと思えるだけの理由が見えないのではないか、ということです。

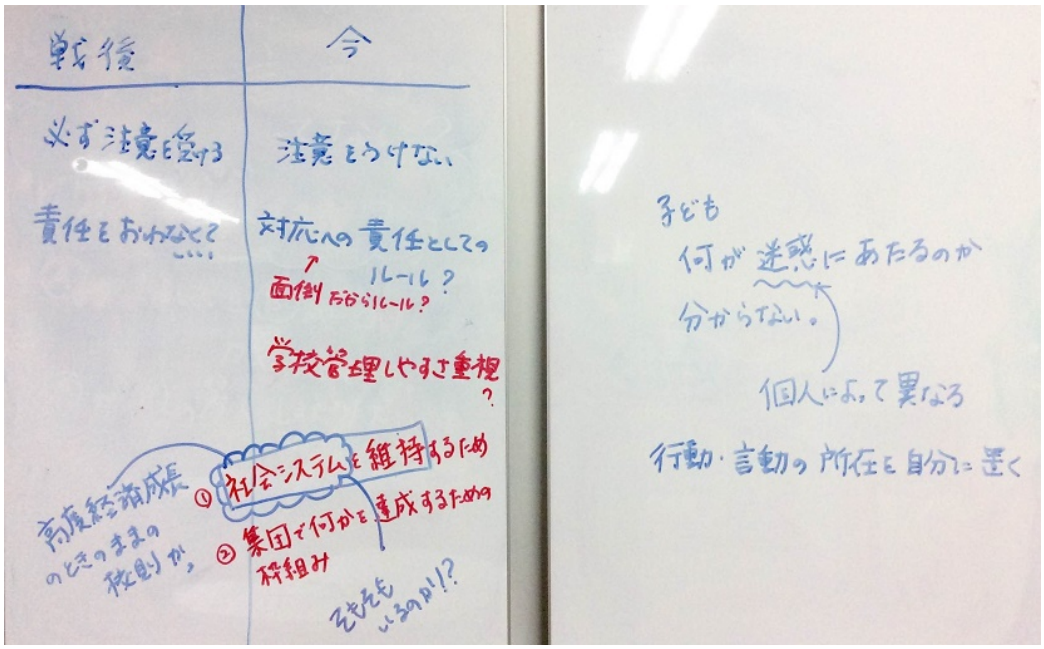
■校則は、誰のためか
ルールが作られるところには必ず理由があるはずです。にもかかわらず、生徒にはそれが伝わっておらず、学校側も伝える努力をしていない。これはどういうことでしょうか。
もしかすると、ルールが必要な理由は生徒側ではなく学校側にあるのではないでしょうか。学校がルールを必要とする理由は何でしょうか。学校が校則を設けることで得られるメリットとしてどんなことが考えられるでしょうか。
それは、生徒たちを効率よく管理することかもしれません。異分子が紛れ込んだときに見えやすくして速やかに対処するためです。共同体の乱れを是正し、学校という場所の秩序を維持するためです。そう考えると、学校側が校則を設ける本当の理由を生徒や保護者たちに説明できない事情にもうなずけます。校則は学校のためにある、なぜならそのほうが生徒たちを管理しやすいからです。「あなたたちを管理・統制・コントロールするために校則はあるのです」などとはさすがに言えません。だから伝える努力もしないし、むしろ理由は知らないほうがありがたいのかもしれません。だから「どうして校則が存在しているのか。それは必要なのか」と真正面から質問してくる生徒は、「問題児」として扱われるわけです。学校にとって、「哲学者」は一番苦手な「問題児」かもしれません。

ここで参加者が「もともとは子どもたちへの動機づけがあったのではないか」と発言しました。社会に出てから子どもたち自身が困らないように、世の中の善悪を見極められるようになってほしい、との願いを込めて昔の大人は校則を作ったのではないか。つまり、もともとは中身が入っていたものがいつのまにか中身がなくなって、箱だけが残ってしまった状態が今の校則なのかもしれません。

■「他人に迷惑をかけない」
一人の参加者が次のように発言しました。「ルールには 2 種類あるように思う。一つは社会や国が決めるルール、もう一つは当人同士が決めるルール」法律や条例、校則、社則、社会的マナーなどは前者です。つまり、社会を円滑に動かしていくためのシステムです。他方、企業で取引先と決めたルールや仕事仲間との約束事などは後者の例として当てはまるでしょう。そして、本当に大事なのは前者ではなく後者、つまり**当事者同士の合意と信頼に基づくルール**だけなのではないか、ということです。

また「社会的ルールとして唯一必要なルールがあるとすれば、それは**他人に迷惑をかけない**ことではないか」という意見も出ました。それさえ守れば、あとは個性として多様性として認めてよいのではないか、という意見です。
しかし、子どもには迷惑の意味がよく理解できません。どういう行為が他人に迷惑をかけない行為に該当するのかうまく判断できません。だから親や教師は、やっていい行動とやってはいけない行動をこまかく指定するのかもしれません。
学生が「社会的ルールはある程度あったほうが助かる人もいる。少なくとも自分は助かる」と発言しました。確かに一定の基準があったほうが迷わなくて済みます。そのほうが生きやすい人たちがいることも忘れてはいけません。自力ではうまく判断できなくても社会の中でともに暮らしていくために、一定の規範を可視化する社会システムは大事なのかもしれません。

■社会システムは可能か――現代文明社会のゆくえ

ここで「社会システムは必要か」との質問が出ました。この質問は、社会システムはあって当然という暗黙の思い込みを崩す問いかけであり、哲学的に見て良質な問いかけです。さらに次のように言い換えました。「必要か、というより、これからの社会で可能か」
確かに、インターネット空間に代表されるように現代では旧来の社会システムが通用しなくなっています。戦後復興期・高度経済成長期のように、大きな統一的理念に向かって日本国民が一丸となって進んでいた時代とは異なり、現代は欲望分散型の社会です。個々の欲望が乱立し、それぞれの欲望が、好き勝手な方向を向いて自己完結しているように見えます。共通の関心で結びつく人びとだけで閉じたコミュニティやサークルを作り、それが無秩序に点在しています。自分たちのルールを作り、それに従う者は受け入れ、破る者は排除する。インターネット空間にあるのは、従来の社会的・道徳的ルールではなく、共通の関心と利益に基づいた暗黙の契約です。それは明文化されることなく、空気を読むという方法で共有されます。そのルールを犯す者は、晒され、吊るし上げられ、炎上する。炎上したあとは仲直りという方法で鎮火するのではなく、アカウントを削除するという方法で社会から消えていきます。
AI（人工知能）技術の飛躍的な進化により、これから本格的にコンピューター全盛時代に突入しますが、バーチャル空間が日常に浸透し、いずれ現実空間がコンピューターによって仮想的に構成される時代が訪れたときに、はたして社会とは何を意味するのか。人と人とのつながりは、どのような様相を帯びるのか。考えるべきことは尽きません。
校則やルールの話から、最後には、社会システムの作り方にまで話が展開しました。

対話中はほかにも、生徒指導の先生に自らお願いして前髪を切ってもらった話、規則正しく制服を着ていたら不良の女子にスカートを奪われた話、何年も母親の言いつけを忠実に守り節度のある服装で毎日を過ごしてきたが、あるとき派手な服装に変えてみたら「こっちのほうが似合うじゃない」と言われて愕然とした話など、ルールをめぐる興味深い逸話がたくさん出ました。
参加者たちが物怖じすることなく、本音で対話ができる空間は一人では作れません。あらためて対話の力、対話の尊さを参加者たちが感じた第１回目の哲学カフェでした。